

49.

かつて天草にわたって本渡の教会を訪ねたとき、ちょうど復活祭に出会えた。旅立ちの日は風邪の名残があつてためらったけれど約束を破れないままに家を出た。幸いにも熱は出ず気分が次第にましになった。そんな時の復活祭を迎えたのであるから、忘れられない。今も聞こえそうなチャイムに目もとをこすって床を離れた朝を思い出すのである。

こらえてきた冬を終わって陽気な春に迎えられる自然の秩序は、四句節の黙禱の後に来る復活祭の喜びと軌を一に体験し得られて、俳句する我々の幸福をしみじみ思うのである。

あの時の風邪は煙草をまずくした。それから私の禁煙である。記念すべき禁煙となった。

50.

他のことは問わず、ただ俳句は季節を詠むものです。

自然という対象はいつも季節の衣に包まれています。人間の行住坐臥でも勿論季節がつきまとうているのであって、季節のないものは俳句の材料として不適格なものといえます。

芭蕉は笈の小文で四時を友とす…と書いていました。造化（自然）に随うといい造化に還ると繰り返しました。そして造化を花月に代表させています。これは季節現象の代表としてあげたのあつて単に花や月だけの狭義でなく、自然にまといつた季節現象や季節感情を指したのであります。

それ故に季語の扱い方を最も丁寧にかつ周到した配慮を巡らすべきだとひたすら念じています。

51.

万代不易ということと一時流行ということとは何か反対をさしたもののように思つては間違つたのである。

変化が絶えずあるから不易の実態を明らかに見られるのである。

今筆を執っている私はかの春過ぎて夏来るらしの歌にあるとおり山川草木が日々変化してとどまらぬ目前の現象に対し深い興味をわかせている。嫌われる毛虫が青梅に巣くいはじめた。るりの羽をはばたいて二三の蝶がとびまわる。産卵のためらしい。こういう変化を発見しながら、自然の秩序があつて永久に変わる事の無き心理を認める。蝶の生態には真理があることは万代不易として現存すると教えられる。

芭蕉は「赤冊子」に不易と流行の二つに究まりその本一つなりと説く。そして常に変化に心を寄せるのが風雅の誠であるという。まことにそうあるべきだ。